

# 酒田を訪れた人々

— 文人墨客から維新の志士まで —

開催期間: 平成29年6月24日～9月4日

## 開催にあたって

寛文12(1672)年、河村瑞賢かわむらすいけんにより西廻り航路が整備されると、最上川河口に位置する酒田は海運・舟運の拠点となり町は繁栄しました。

北前船は物とともに上方や江戸の文化を湊町みなとまちに運び込み、松尾芭蕉まつおばしゅうをはじめとする文人墨客など、幾多の著名人も酒田へ足を運んでいます。町の人々もまた、彼らを手厚くもてなし交流を深めました。

来遊者たちは湊町の風景や食、そして人々に魅了され、多くの作品をこの地に遺し、酒田の文化発展に大きな影響を与えました。港近くの日和山公園には、酒田を訪れた文人墨客の作品を碑にした「文学の散歩道」が整備されています。

この企画展では、文人墨客や維新の志士など「酒田を訪れた人々」の当地での様子、制作した作品、関わりを示す資料を紹介し、彼らの足跡をたどります。「あの人も酒田に来ていたのか！」という新たな発見の機会になれば幸いです。

本企画展の開催にあたり、貴重な資料を快くご提供くださいました関係機関、ならびにご協力賜りました多くの方々に、心よりお礼申し上げます。

## 酒田の文化に影響を与えた江戸期の俳人

まつおばしゅう  
松尾芭蕉—「奥の細道」の旅で来遊—



松尾芭蕉像(日和山公園内)

正保元年(1644)、伊賀国(現三重県)に生まれ、江戸時代前期に活躍した俳人。俳諧の地位を高めた功績から“俳聖”と称される。「五月雨を集めて早し最上川」「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」などの句が有名。

元禄2年(1689)3月、46歳の時に門人である曾良を伴って江戸を発ち、約2,400km、日数にすると約150日間にわたる、歌枕を巡る大行脚の旅をした。この時の紀行文が『奥の細道』である。

6月10日に鶴岡に入った芭蕉は、3泊した後に内川・赤川・最上川と舟で下って酒田に入り、長く滞在した。この間、多くの人々と交流して名句を残し、酒田には蕉風しゅうふう(芭蕉および門流の俳句の作り方)が広まった。

旅を終えた5年後の元禄7年(1694)に没した。

### 芭蕉の酒田での足跡(酒田市史より)

元禄2年3月、門人・曾良を伴って「奥の細道」の旅に出る。

6月13日 酒田に着き、伊東不玉宅ふぎよくに宿をとる。

- 6月14日 浦役人寺島彦助(安種亭令道)宅にて句会。  
「暑き日を 海に入れたり 最上川」の句を詠む。
- 6月15日 象瀉きさかたに向け出発。
- 6月18日 酒田に帰る。1週間余り不玉宅に宿をとる。
- 6月19日 不玉宅で「あつみ山や 吹浦かけて 夕涼」の句を詠む。
- 6月23日 近江屋三郎兵衛宅で句会を催す。
- 6月25日 不玉と近江屋三郎兵衛に見送られ、酒田を出発。

## 芭蕉をもてなした酒田人

### 伊東不玉

芭蕉の宿を務めた不玉は、慶安元年(1648)に生まれ、下の山(現在は中町一丁目)に住んだ医師。不玉は俳号であり、本名は伊東玄順げんじゆん。芭蕉が訪れた3年後の元禄5年(1692)には、美濃派みのの(美濃国を本拠地とする蕉風一派)の開祖である各務支考かがみしこうを迎え、酒田美濃派を開いた。元禄10年(1697)に50歳で没し、妙法寺に葬られた。

### 近江屋三郎兵衛

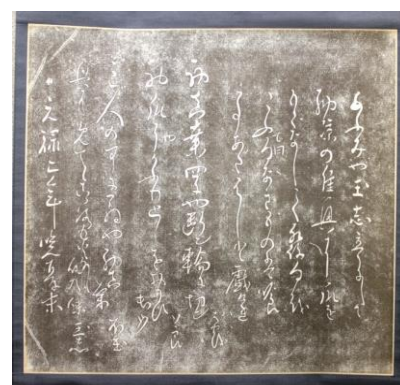
生没年不詳。本町二ノ丁(現在は中町一丁目)に住んだ三十六人衆の長人・近江屋嘉右衛門の子。伊藤不玉の弟子で、俳号は玉志ぎよく。芭蕉来遊の際は、自宅で句会を催し、もてなした。曾良の随行日記には「近江屋三郎兵衛へ被招 夜二入り即興ノ発句有」とある。この時に芭蕉が書いた『玉志亭唱和懐紙』は、文化年中に近江屋が酒田を去る際、本間家に譲られた。現在は本間美術館が所蔵し、県指定文化財となっている。

### 寺島彦助

生没年不詳。本町五ノ丁(現在は本町三丁目)に住んだ浦役人で俳人。俳号は安種亭令道または詮道しんきやう。貞享年間(1684～1687)の初めごろに浦役人となり、御米置場の管理にあたった。芭蕉来遊の際、自宅で句会を開いた。芭蕉、曾良、不玉のほか、三十六人衆の加賀屋藤右衛門(任暁)、八幡源右衛門(扇風)、長崎一左衛門(定連)なども同席した。

## 与謝蕪村—奥州旅行で来遊—

享保元年(1716)、撰津国せんつのかくに(現大阪市)に生まれる。江戸中期に画人・俳人として活躍し、蕉風を再興したことで知られる。「春の海 ひねもすのたり のたりかな」「菜の花や 月は東に 日は西に」などの句が有名。



『玉志亭唱和懐紙』 拓本・石碑

(日和山公園)

あふみや玉志亭にして  
納涼の佳興に瓜を  
もてなして発句を  
こふて曰 句なきものは喰  
事あたはじと戯れければ  
初真桑四にや断ん輪に切ん はせを  
初瓜やかふり廻しをおもひ出づ ソ良  
三人の中に翁や初真桑 不玉  
興にめでてころもとなし瓜の味 玉志  
元禄二年晚夏末

芭蕉の「奥の細道」に随行した曾良の日記によると、元禄二年(一六八九)六月二十三日に近江屋に招かれて即興ぼくくの発句会を催したときの作。芭蕉が残した懐紙が本間美術館に保存され、その石碑が日和山公園に立っている。



伊東不玉宅 石碑

(中町1丁目)

俳句と絵画を組み合わせた“俳画”を完成させた(※諸説あり)といわれ、山形美術館所蔵の『奥の細道図屏風』(重要文化財)では、芭蕉の旅を表現している。

酒田には寛保2年(1742)、秋の奥州旅行の際に訪れているが、その時の様子を蕪村はあまり書き残しておらず、どのような行動をとったかは不明である。天明3年(1783)に京都で没する。

### とこよだちようすい 常世田長翠—酒田俳句界を支えた指導者—

下総国(現千葉県)出身の俳人。宝暦3年(1753)に生まれ、江戸日本橋の俳人・加舎白雄かやしらおが宗匠を務める春秋庵しゅうしゅうあん(蕉風一派)の門に入る。

門下3,000人と称された春秋庵の2世宗匠となり、江戸に住んでいたが、寛政12年(1800)と享和元年(1801)に酒田に滞在し、酒田俳人からの強い勧誘を受けたことをきっかけに移住を決意。享和2年(1802)、浄徳寺門前に胡床庵こじょうあんを構えた。文化10年(1813)に亡くなるまで酒田で暮らした。

本間家4代当主・光道こうどうは、長翠に教えを受けるとともに、経済的に援助しており、船場町に数寄屋造りの家屋を建てて住まわせている。船場町の廻船問屋であった本庄屋三郎兵衛も援助している。長翠が指導した酒田の俳人は100人以上にのぼり、酒田俳壇の発展に大きく貢献した。



常世田長翠筆『月の窓』(江戸後期)  
「月の窓 雨見んために あけはせね」



常世田長翠筆 短冊(江戸後期)  
「朝顔の実になりすます長夜なり」

### 長翠の流れをくむ酒田の俳人

#### たから かじょう 宝夏静

越後出身の僧侶。文政元年(1818)に生まれる。明治元年(1868)ころ、酒田に来て妙法寺第22世住職となる。長翠の流れをくんで酒田春秋庵系2世となり、佐藤良次(俳号は古夢)など多くの門人を養成する。春秋庵系の再興を目指したが、かつての勢いを取り戻すには至らなかった。明治25年(1892)、75歳で没する。

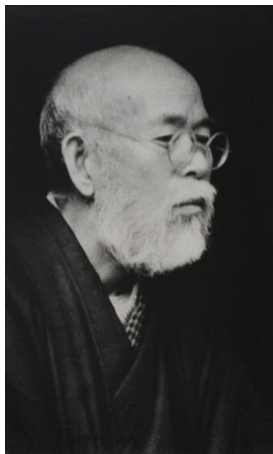
#### い さ こなん 伊佐湖南

文政6年(1823)に生まれる。酒田龍巖寺38世住職。俳号は風蒼庵ふうそうあん。俳諧に長じて春秋庵系に属し、酒田の俳壇を指導した。明治16年(1883)、61歳で没し、龍巖寺に葬られる。



## 斎藤茂吉と明治以降の歌人・俳人

### 斎藤茂吉—芭蕉の足跡をたどって来酒—



(昭和21年撮影)

大石田歴史民俗資料館提供)

歌人であり、精神科医としても功績を残した斎藤茂吉は、明治15年(1882)、山形県南村山郡金瓶村(現上市市)に生まれた。旧制第一高校(東京大学の前身)在学中に読んだ、正岡子規の『竹の里歌』に感銘を受け、子規の流れをくむ伊藤左千夫に師事。本格的に歌人への道を歩き出した。短歌雑誌『アララギ』の編集にかかわり、大正2年(1913)に第一歌集『赤光』を刊行すると、大きな反響を呼んだ。

戦時中の昭和20年(1945)4月に故郷の金瓶に疎開し、終戦を迎える。同21年に芭蕉の足跡が残る最上川沿いの大石田町へ移り、翌年には東京に戻った。茂吉は大石田で暮らした家に「聴禽書屋」と名付け、現在も大石田町立歴史民俗資料館と併設して残っている。

茂吉は、明治28年(1895)に修学旅行で酒田に来ている。次に訪れたのは、30年以上たった昭和15年(1940)、同22年(1947)である。芭蕉来遊の地として、酒田に親しみを持っていた茂吉は、昭和22年の来酒時、

藤井康夫(※)を訪ね、芭蕉が来酒時のこと、特に寺島彦助(安種)について聞いている。この前後、問い合わせの書簡をしきりに藤井に出すほど熱心で、「安種亭のことおもひて現なる港の近き道のぼりけり」「魚食いて安らかなりし朝めざめ藤井康夫の庭に下りたつ」などの歌も詠んでいる。

昭和28年(1953)、70歳で他界した。

※藤井康夫…酒田の歌人、教師。浜田の大地主の家に生まれ、少年のころより短歌に親しんだ。

昭和7年(1932)、酒田短歌会の結成に参画し、代表を務めた。

### 酒田でけがを負った茂吉

昭和15年10月20日、酒田を訪れていた茂吉は、象潟に行こうと汽車に乗っていた。しかし、発車間際に網棚から落ちてきたブリキ製品が左目にあたり傷を負った。象潟行きを取りやめ、すぐに汽車を降りて、上内匠町に住む長谷部医師の治療を受けた。

このけがのために、泊まる予定のなかった酒田に2泊した茂吉は、その時のことを短歌に詠んでいる。

酒田より北ゆくことを諦めて二日をあたり海風のおと  
寺の鐘まぢかにひびき日暮るらし眼帯をしてわがすはり居るとき  
羽後のくに酒田の駅に負傷して人力車に乗る心はいたし

のちに長谷部医師に、虎屋のようかんと風呂敷をお礼に贈っている。礼状には「御地小松やのには或は及ばざるの感いたし候も宮内庁出入のものゆゑ記念に御笑味のほど御願申上候」とある。

長谷部医師が返礼に庄内の種無柿を贈ると、茂吉は「今般は御地名産 上等種無柿 御恵与にあづかり御芳情千万 忝く厚く御礼申上候。家内一同いただき幸をわかち申上候」と再び礼状を送っている。

ゆうきあいそうか  
結城哀草果—茂吉に師事した農民歌人—



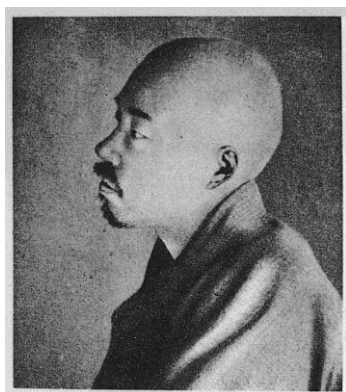
秋田旅行にて左から板垣家子夫(アララギ歌人)、茂吉、哀草果  
(大石田歴史民俗資料館提供)

農業のかたわら、歌人、随筆家として活動した哀草果は、明治26年(1893)、山形市に生まれた。大正3年(1914)、斎藤茂吉が携わっていた短歌誌『アララギ』に加わり、茂吉に師事した。

昭和30年に歌誌『赤光』を創刊。歌集に『山麓』(昭和4年)、『すだま』(昭和35年)などがある。質素で素朴な歌を多く作った。昭和46年(1971)に山形市名誉市民となる。昭和49年(1974)、80歳で没した。

酒田へは、昭和15年(1940)に鳥海山を訪れた際に来ていた。また、時期は不明だが、たびたび短歌を指導しに訪れている。

まさおか し き  
正岡子規—「はて知らずの記」の旅で来遊—



(国立国会図書館HPより転載)

歌人・俳人として名高く、斎藤茂吉にも大きな影響を与えた正岡子規は、慶応3年(1867)、伊予国(現在の愛媛県)に生まれる。12歳から漢詩を、19歳から俳句を作り始めた。

俳誌『ホトギス』を創刊し、物事をありのままに描写する「写生文」を提唱。『歌よみに与ふる書』を発表して旧派歌人らを批判、短歌革新を試みるなど、後世に大きな影響を与えた。

明治35年(1902)に結核のため亡くなった。

子規は、明治26年(1893)7月から奥羽を旅している。その時の紀行文『はて知らずの記』によれば、まず松島を目指し、関山峠を越えて出羽国に入り、大石田から川舟で最上川を下った。古口・清川でそれぞれ1泊し、8月9日に酒田に到着している。その夜、今町の翠松館すいしょうかんに1泊した子規は、

下駄を捨て草鞋わらじに履き替え、翌朝に吹浦へ向かって出発している。酒田で詠んだ歌に、碑に刻まれたもののほか、以下の句などがある。

木槿むくげ咲く土手の人馬や酒田道  
前後暑さ涼しさ半分づつ (酒田翠松館にて)  
松の木に提灯下げて夕涼み (同上)

維新前後に活躍した人々

たかやまひこくろう  
高山彦九郎—鳥海登山に挑戦—

延享4年(1747)、上野国(現群馬県)細谷村に生まれた、江戸中期の尊王家。蒲生君平はもうちゅんぺい(尊王論者)・林子平はやししへい(思想家)とともに「寛政の三奇人」といわれ、多くの日記・紀行文を残す。しかし、その思想や行動

が幕府に嫌われ、圧迫により寛政5年(1793)に自刃する。

多年にわたる日記を残し、吉田松陰はじめとする幕末の志士たちに多くの影響を与えた。

寛政2年(1790)6月、蝦夷地踏査のため江戸を発ち、各地を巡っている。その際に書いた紀行文が『北行日記』である。その中には、出羽三山を参拝し、8月8日に新堀村を經由して酒田に来遊したと書いている。酒田では伝馬町の太郎左衛門宅に宿泊した。

その後、遊佐の蕨岡から鳥海山を登っている。1度目は途中で強風と雷雨に見舞われて断念したが、翌日は晴れて登山に成功、頂上からの眺めを堪能している。

### よしだしょういん 吉田松陰—藩の許可を待たずに東北見聞の旅に出る—



(国立国会図書館HPより転載)

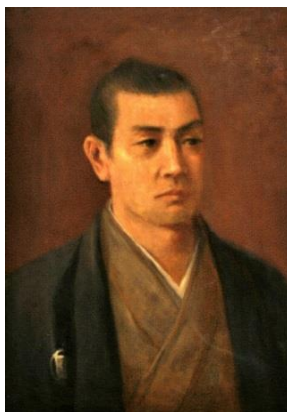
天保元年(1830)に長州萩(現在の山口県萩市)で生まれた、幕末の教育者・思想家。

嘉永4年(1851)の暮れ、外国船がしきりに出沒する北辺の地を見聞するために、東北遊歴の旅に出た。この旅を記録した『東北遊日記』によると、庄内に入ったのは、嘉永5年(1852)2月21日である。

藩の許可を得ないうちに旅に出たため、御家人召放(解雇)となる。その後、江戸で佐久間象山に洋学を学ぶが、嘉永7年(1854)、下田で米  
国船に乗り込もうとして失敗し、投獄の後に萩の実家に幽閉される。ここで松下村塾を開き、高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋など多くの逸材を育てた。

安政5年(1858)、日米修好通商条約の調印を批判し、老中間部詮勝の暗殺を企てて捕えられ、「安政の大獄」により処刑された。

### きよかわはちろう 清河八郎—清川に生まれた尊王攘夷の指導者—



(清河八郎記念館提供)

清河八郎は、吉田松陰と同じ天保元年(1830)に、出羽国田川郡清川村(現在の庄内町)に生まれた。

18歳になると、剣術修行のために毎日酒田に通っていた。その年、江戸に出ると、東条一堂塾、安積良斎塾、当時の最高学府だった昌平校で学ぶ。22歳から北辰一刀流の創始者・千葉周作の道場「玄武館」で剣術を修める。安政元年(1854)、弱冠25歳で神田に「清河塾」を開き、学問と剣術を教えた。

清河は万延元年(1860)、大老・井伊直弼が暗殺された「桜田門外の変」をきっかけに、尊王攘夷・倒幕を目指すようになり、幕臣・山岡鉄舟をはじめ薩摩藩士など同志18人と「虎尾の会」を結成する。

しかし、倒幕の意志を隠し、幕府の政事総裁・松平春嶽に提出した建白書「急務三策」が認められ、将軍警護を目的とした浪士組編成の人選を任せられる。文久3年(1863)2月、浪士組が結成され、集まった浪士たちに清河が本当の目的を告げると、佐幕派の近藤勇ら17人が脱退。「新撰組」を結成するに至った。浪士組は天皇直属



の軍となった。

こうした清河の動きは幕府より危険視された。浪士組結成からわずか2カ月後の4月13日、攘夷決行のため江戸に下ったが、幕府の手により暗殺される。享年34歳。清川村の歓喜寺に葬られる。

明治41年(1908)、特旨(天皇のおぼしめし)により「正四位」が贈られ、昭和8年(1933)には郷里清川に「清河神社」が創建された。没後100年にあたる昭和37年(1962)、神社境内に「清河八郎記念館」が建てられた。

## 今町で遊んだ清河八郎

清河八郎は14、15歳のころから酒田に剣を学びに来ている。八郎の日記『旦起私乗』(山形県指定文化財)には、天保14年(1843)4月に、山王祭を見て初めて「楊楼」にのぼったと記されている。楊楼は、今町遊廓を指すと思われるが、八郎はまだ14歳だった。(参考:小山松勝一郎著『清河八郎』)

18歳の時にも、清川村の生家から毎日、半日の日程で、酒田の天正寺町伊藤<sup>やぶら</sup>藤<sup>じ</sup>治道場に剣術修行に通っているが、このころに八郎が書いた手記『琵琶行』には、今町遊廓の妓楼について、何枚かにわたってメモしてある。はじめに「酒田今町八百一名、揚女あげ代五百文」とあり、屋号と女性の名前を細かく書き留めている。(参考:佐藤三郎著『酒田の歴史』)

にしおかしゅうせき

## 西岡周碩—第一次酒田県の大参事—

天保9年(1838)、佐賀に生まれる。佐賀蓮池藩の医師で、戊辰戦争では北越討伐に従軍した。

その後は官職につき、明治2年(1869)、酒田民政局の長官として赴任し、廃藩後の処理に当たった。同年6月、天正寺に酒田初の公立学校・学而館を創立し、子弟を教育する。

8月に民政局が廃止され、第一次酒田県が置かれると、西岡は大参事に任ぜられ功績をあげた。しかし、庄内農民が起こした減税運動(天狗運動)がしずまらず、10月に失政の責めを問われて、宮城の白石<sup>あざせ</sup>按察使府に謹慎を命じられる。

後に東京府大参事、判事を歴任し、明治23年(1890)に函館控訴院長となる。晩年は小田原で悠々自適の生活を送った。詩、文章、書でも知られた。

大正元年(1912)、75歳で没する。

第一次酒田県の大参事時代、失政の責任を問われて謹慎を命じられた時の、やり場のない心境を表した詩か

第一次酒田県の大参事時代、失政の責任を問われて謹慎を命じられた時の、やり場のない心境を表した詩か

彫蟲…小さな虫の彫刻を作ること、こまかい細工

擒…捕らえられた大将

懐人八首之一 宜軒主人句

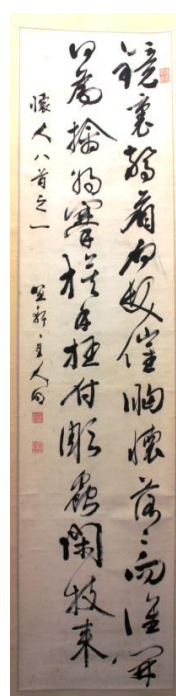
何為れぞ 擒將を牽撫せし手

胸懐落々 誰に向かつてか開かん

鏡裏驚き看る 白髪の催すを

七言絶句 西岡周碩筆(明治初期)

七言絶句 西岡周碩筆(明治初期)



みしまみちつね  
**三島通庸**—鬼と呼ばれた初代酒田県令—



(国立国会図書館HPより転載)

天保6年(1835)、鹿児島<sup>おおくぼとしみち</sup>の薩摩藩士の家に生まれる。剣法や兵学を修め、24歳の時に大久保利通らとともに脱藩。討幕運動に参加し、戊辰戦争では山陰・北陸地方に出陣する。

維新後は明治新政府に入り、明治7年(1874)、酒田県の初代県令として赴任する。翌8年に鶴岡県令、9年には合併後の初代山形県令に任命され、明治初期の山形県に多大な影響を与えた。

学校の創建・道路整備など、土木工事に尽力したことから「土木県令」と呼ばれたが、それらの工事に必要な労力と費用負担を市民に課したことで「鬼県令」とも呼ばれる。

明治18年(1885)には警視総監となり、反政府派の取り締まりに取り組み、同21年(1888)、53歳で没した。



初代両羽橋(明治27年建造)

三島は庄内の人々の願いを聞き入れ、両羽橋の架橋を約束した。橋の建設には12万3,322円の工費が費やされたが、三島の勧めでワツパ騒動の返還金の一部も充てられた。

秋月  
 にごりなきひとの心の水鏡  
 うつせばすめる秋の夜の月  
 通庸

和歌  
 三島通庸筆(明治初期)



**大正ロマンを彩った人々**

たけひさゆめじ  
**竹久夢二**—酒田に多くの作品を残した美人画の名手—

明治17年(1884)、岡山県<sup>おおく</sup>邑久郡(現瀬戸内市)に生まれる。本名は茂次郎。大正ロマンの代名詞ともいえる画家で、現在もその絵は「夢二式美人画」として人気がある。

明治42年(1909)、初の画集『夢二画集春の巻』で一躍有名になる。東京呉服橋に自身がデザインした小物を販売する「港屋」を開き、人気を博した。恋多き人物でもあり、女性との逸話も多く存在する。





料亭「宇八」にて（大正10年頃撮影）

左から、後藤助太郎、夢二、森重治

夢二が酒田に初めて来たのは大正10年(1921)1月30日。雪を見ようと、知人の呉服商・後藤助太郎を訪ねての来遊だった。後藤から紹介された本町の地主・森重治の支援を受け、料亭宇八(現在の山王くらぶ)に宿泊した夢二は、宇八で画会を開いた。この時、後藤、森とともに、酒田新聞主筆の佐藤良次も支援し、新聞に記事を書いた。

画会に出品した作品は200余点にのぼり、盛況のうち終わった。

翌11年に再訪し、森や宇八の主人、芸者たちとともに象潟旅行に出かけている。酒田の商人たちの注文に

応じて、絵を何点も描いたといい、多くの作品を酒田に残している。

昭和9年(1934)、結核により49歳の若さで没した。

### 森重治と佐藤良次－夢二を支援した酒田の人－

夢二が最初に酒田を訪れた時に、後藤助太郎から夢二を紹介され、それ以降パトロンとして支援した森重治(生年不明)。本町に住んだ地主で、明治維新後、民権運動家として活動した森藤右衛門の分家に当たる。昭和11年(1936)没。

夢二は、本来なら宿泊はできない料亭宇八の茶室に寝泊まりをしたが、宇八の常連客だった森が頼んだからだという。親交は夢二が亡くなるまで続き、夢二が晩年に長野県富士見の療養所で書いた日記に「山形の森さんから餅がつく、早速焼いてたべる」とある。

夢二の画会開催に協力した佐藤良次は、明治4年(1871)鶴岡生まれ。酒田新聞の主筆を務め、政治、文芸、郷土史の評論で活躍した。交際の範囲が広く、犬養毅をはじめ、多くの著名人を酒田に招いている。昭和5年(1930)没。良次の息子で、郷土史家としても活躍した佐藤三郎は、その著書に、夢二が酒田を去る際、夢二が家に来たが、良次が不在だったので、持ってきた包みののし紙に「粗品竹久夢二」と書いて帰ったと書いている。

### 佐藤千夜子・野口雨情・中山晋平－音楽と講演の会のために来酒－

大正15年8月、『東京行進曲』で知られる天童出身の歌手・佐藤千夜子と詩人・野口雨情、作曲家・中山晋平による音楽と講演の会が、酒田公会堂で開かれた。この時に発表されたのは、酒田の実業家で、川柳家としても活躍した荒木彦太郎(柳号は京之助)の川柳2句に、中山晋平がつけた曲であり、佐藤千夜子が独唱した。

彦太郎は、川柳の師匠・井上剣花坊を通じて雨情と交友関係にあった。中山との関係は不明だが、この会の翌年に出版された『荒木京之助句集』に剣花坊が書いた序文に「自作の川柳に、大家(注:中山)を請うて曲譜をつけ」とあり、彦太郎が直接、中山に頼んだらしい。

来酒時、野口と中山は共同で『酒田小唄』を作っている。

## 佐藤 千夜子

明治30年(1897)生まれ。天童市出身の歌手。本名は千代。14歳で上京し、東京音楽学校に在籍中、聖歌隊員として讚美歌を独唱したところ、中山晋平に見いだされた。昭和3年(1928)、31歳のとき、日本で最初のレコード会社「日本ビクター」で『波浮の港』を吹き込み、レコード歌手第1号となる。翌年には『東京行進曲』が大ヒット。その後もヒット曲を連発し、全64曲を歌った。その生涯はNHK朝の連続ドラマ『いちばん星』のモデルにもなっている。

晩年は闘病生活を送り、昭和43年(1968)に71歳で病没する。



野口雨情らを囲んで（大正15年8月19日撮影）

野口雨情らの歓迎会が催された相馬屋で、前列左から中村金蔵、荒木京之助、野口雨情、中山晋平、佐藤千夜子の面々。

## 野口 雨情

明治15年(1882)、茨城県に生まれる。童謡のほか、日本全国をはじめ当時の樺太、朝鮮、満州、台湾にいたるまで多くの地方民謡を作詞した詩人。『七つの子』『赤い靴』などの詩を書いたことで有名。『波浮の港』も作詞した。昭和20年(1945)、63歳で没する。

## 中山 晋平

明治22年(1889)生まれ。長野県出身の作曲家。歌謡、民謡、童謡、新民謡、社歌、校歌など、さまざまな曲を制作する。大正3年(1914)、松井須磨子が歌う「カチューシャの唄」を作曲、大ヒットする。野口雨情と出会い、新しい民謡・童謡の創作に対する情熱に刺激を受け、『船頭小唄』『波浮の港』の作曲を手がける。昭和27年(1952)、65歳で没する。

あらききょうのすけ

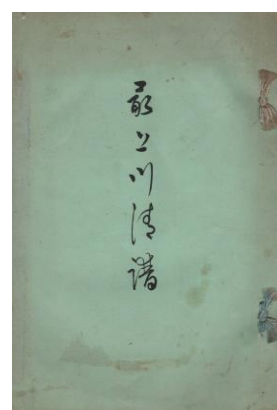
## 荒木京之助(彦太郎) - 光丘文庫初代文庫長も務めた川柳家 -

野口雨情と親交があった荒木京之助(本名は彦太郎)は、明治23年(1890)、下内匠町の富豪・荒木彦助の長男として生まれ、後に彦助の名前を継いだ。

庄内中学から旧制第二高等学校(東北大学の前身)、京都帝国大学に進んだが中退。川柳を始めたのは大正10年(1921)ころからといわれる。当時の川柳の大家・井上剣花坊と親交があり、その縁で野口雨情と知り合った。

酒田米穀取引所仲買人としても活躍。光丘文庫の初代理事長を務め、図書1,850冊を寄贈するなど、社会事業にも熱心だった。剣道は4段の腕前で、自宅に荒木道場をつくった。著書に『荒木京之助句集』や『最上川清譜』がある。

昭和21年(1946)に没する。

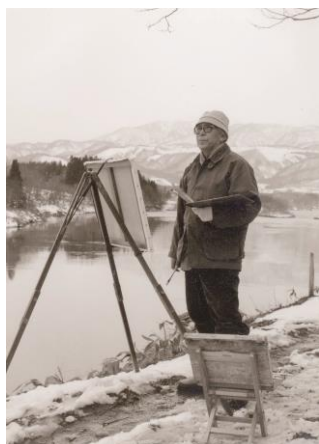


荒木京之助編『最上川清譜』

(大正15年)

最上川を詠んだ歌などをまとめている。

ましもけいじ  
真下慶治—最上川を愛した画家—



最上川そばで絵を描く真下慶治  
(昭和36年 真下清美氏提供)

生涯にわたって最上川を描いた画家・真下慶治は、大正3年(1914)に最上郡戸沢村に生まれた。

文化学院美術部卒業後、番衆技塾(二科美術研究所)で学び、22歳で故郷に戻ってからは、平成5年(1993)に79歳で亡くなるまで、母なる川への想いを、そして春を待つ雪国の人びとの心を描き続けた。

昭和31年(1956)に山形市小白川町、同53年(1978)に村山市大淀、同63年(1988)に旧松山町にアトリエを建て県内各地で制作に臨んだ。

一水会常任委員、日展評議員、山形大学教授などを務めた。また日展審査員を3回も務めるなど郷土が誇る日本画壇の重鎮であった。

現在、その作品は村山市にある「真下慶治記念美術館」、真下がアトリエを構えた旧松山町の「松山文化伝承館 真下慶治記念室」で見ることができる。

今回は、真下慶治記念美術館館長の真下清美氏、松山文化伝承館の協力を得て、酒田で描いた最上川河口と新井田川の作品を展示させていただいた。

いぶせますじ  
井伏鱒二—酒田の常連釣り人—



井伏鱒二 酒田港突堤にて  
(昭和34年撮影)

昭和34年に釣りにやってきた井伏。しかし何も釣れなかった。中央が井伏。「ふるさとの思い出写真集明治大正昭和酒田(佐藤三郎編)」より

明治31年(1898)、広島県福山市に生まれる。画家を志していたが、早稲田大学に入学し、文学の道に進んだ。『山椒魚』『ジョン万次郎漂流記』(直木賞受賞作)、映画化もされた『黒い雨』などの作品が有名。

釣り好きとしても知られ、本名の「満<sup>ますじ</sup>寿二」を「鱒二」と書いてペンネームにしている。酒田へは、昭和8年(1933)から同48年(1973)までに、6回ほど訪れているが、少なくとも3回は釣りを楽しんでいるようだ。昭和16年(1941)には最上川河口でのハゼ釣り、吹浦沖での船釣りを堪能。昭和34年(1959)には本間美術館の池でコイ釣りをしたことを「食の文学館 第3号」(昭和63年)で語っている。

初めて来酒した時に案内役を務めた郷土史家・佐藤三郎と親しくなり、酒田に来るといつも佐藤を訪ねていた。

平成5年(1993)に95歳で没する。





「食の文学館」(昭和63年発行)  
井伏鱒二特別寄稿文

「忘れられない酒田のこと」より  
抜粋

…鯉といえば、美術館わきにある  
睡蓮の池に、大きなやつが沢山  
いた。本間裕介さん(本間美術館館  
長)が、どうぞお釣りにくださいと、  
楽しみに釣らせてくれた。丸岡君  
※なんかはいっしょうけんめい釣  
っていたが…かかっても睡蓮の  
なかへ引き込まれてしまうから、  
なかなか釣りがあげられない。それ  
に、その合間に掛軸なんか見せて  
もらったりしていたから好加減な  
もんだ。…

※丸岡明氏…井伏に同行した作  
家。著書に『生きものの記録』な  
ど。

かいこうたけし

## 開高健—釣りとフランス料理を楽しむ—

昭和5年(1930)、大阪市に生まれる。寿屋(現在のサントリー)の宣伝部員として活躍し、昭和33年(1958)2月に小説『裸の王様』で芥川賞を受賞する。その後、退職し執筆に専念する。

昭和39年(1964)、朝日新聞社の臨時特派員として戦時下のベトナムを取材。最前線で反政府ゲリラの機銃掃射に遭っている。この取材での体験をもとに書いた『輝ける闇』で毎日出版文化賞を受賞した。

無類の釣り好きで、『オーパ!』など釣りをテーマにした作品も多く、酒田へは昭和49年(1974)、釣りの師匠・井伏鱒二の紹介で訪れている。鱒二と同じく、佐藤三郎の案内でスズキ釣りを楽しんだ。

この時、ル・ポットフーの料理を味わったが、食通としても知られる開高は、数週間後にパーティーで会った、鶴岡出身の作家・丸谷オーに「すばらしいフランス料理店を見つけた、酒田で」と語っている。丸谷もル・ポットフーを訪れ、その料理を「裏日本随一のフランス料理」と題したエッセイで絶賛した。

平成元年(1989)、58歳の若さで亡くなった。

いのうえやすし

## 井上靖—酒田が登場する名作『氷壁』を執筆—

酒田が登場する小説『氷壁』を書いた井上靖は、明治40年(1907)に北海道旭川市に生まれた。京都帝国大学哲学科卒業後、毎日新聞社に入り、昭和25年(1950)、『闘牛』で芥川賞を受賞。以降『憂愁平野』『氷壁』等の叙情性ゆたかな小説を次々と発表した。映画化された『わが母の記』や『狼災記』も有名である。

昭和39年(1964)に日本芸術院会員となり、同51年(1976)には文化勲章を受章。平成3年(1991)、83歳で没した。

酒田へは、『氷壁』を「朝日新聞」で連載するにあたり(連載期間は昭和31~32年)、挿絵画家の生沢朗とともに日和山を訪れている。小



映画『氷壁』ロケ風景(昭和33年)

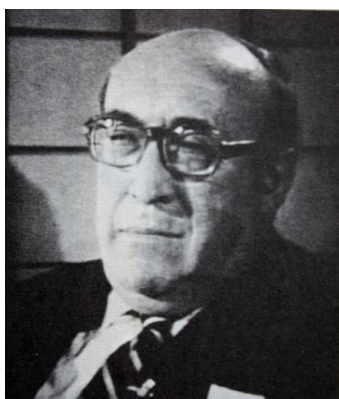
ロケは日和山公園、下の日枝神社、鏡屋邸などで行われた。写真の女優は野添ひとみ。

説は昭和33年(1958)に映画化され、酒田で撮影が行われた時には、その様子を一目見ようと大勢の人が集まった。

また、即身仏に強い関心を抱いた井上は、昭和35年(1960)7月、早稲田大学の安藤更生教授を団長とする調査団が、海向寺で即身仏の学術調査を行った際、団員の一人として酒田を訪れている。多忙な中、夜行で酒田に到着き、その日の夜行で帰京するという多忙な日程だった。

昭和60年(1985)4月20日には、日和山に建てられた石碑の除幕式に夫婦で出席、午後は市民会館で講演を行っている。

## マーク・ゲイン – 終戦直後に本間家取材したジャーナリスト –



終戦直後の昭和20年(1945)12月24日、アメリカのシカゴ・サンタイムズの特派員マーク・ゲインが酒田を訪れた。ちょうどGHQの指令による農地改革が始まろうとしていた時期であり、日本一の大地主といわれた本間家がある酒田を、敗戦後の日本の変化を見るのに最も適した場所と考えたからである。

翌25日、ゲインはインタビューのために本間家を訪ね、本間信吉氏、元也氏、祐介氏の3人に、本間家と小作人の関係、農地改革に対する考えなどを聞いている。

1年あまり日本に滞在したゲインは、昭和23年(1948)に、その間の体験をまとめた『ニッポン日記』をアメリカで出版した。日本では同26年(1951)に日本語訳が出版され、ベストセラーとなったが、酒田滞在中の出来事も詳しく記されている。

昭和44年(1969)、再び来日したゲインは、農地改革後の酒田がどう変わったか取材している。

私が酒田へ来たのは決して偶然来た訳ではなかった。今度の旅行に出かける前、私は東京でいろいろ研究した。酒田は敗戦の日本に私が探し求めているいくつかの解答を得るのに最も適しているように思えたのだ。ここは新しい思想の侵入には抵抗の強そうな保守的な町だった。戦闘的な国家主義の伝統的な城塞としての酒田は反民主主義運動に沃土を提供するだろう。小さな堅固な田舎町としての酒田は、我々の政策にも日本民主化の難易に対しても絶好の試験地となる。

最後に、だが決して重要でなくはない理由は本間と呼ばれる一族の存在だった。

(マーク・ゲイン著『ニッポン日記上』より)



## ヘレン・ケラー—身障者事業への協力求め酒田で講演—

終戦間もない酒田を訪れた、忘れることのできない外国人に、視覚、聴覚の重複障害を克服し、教育者、福祉活動家として活動したヘレン・ケラーがいる。

ケラーは、昭和23年(1948)、身障者事業に対する協力を求めるキャンペーンのために来日し、9月20日に来酒した。

翌21日に琢成小学校で開かれた歓迎県民大会には、ケラーの講演を聞こうと3,000人以上の人が詰め掛けた。

大会の後、本間美術館を訪れたケラーは、手で触り、においをかいだりしながら美術品を鑑賞したという。その後、滞在先の名古屋から本間家に送られてきたケラーの礼状は、本間美術館に保存されている。



酒田駅で見送りの人との別れを惜しむヘレン・ケラー  
(昭和23年9月)

## 日和山「文学の散歩道」を歩いてみよう

日和山公園一帯を巡る長さ1,200メートルの散策路には、酒田にゆかりの深い文人墨客が残した詩歌や文芸作品の文学碑29基が点在し、「文学の散歩道」として親しまれている。

昭和58年(1983)の酒田市制50周年の記念事業として整備され、その時に20基の文学碑を建てているが、江戸時代に建てられた石碑もある。

最も古い石碑は、天明8年(1788)に建てられた松尾芭蕉の「温海山や吹浦かけてゆふ涼」の句碑。中町方面から公園に入るとすぐ、芭蕉像のそばに立っている。

春秋庵系の俳諧を酒田に広めた俳人・常世田長翠の「人の柳うらやましくもなりにけり」の句碑も古く、文政元年(1818)に建てられており、酒田湊の繁栄を象徴する日和山の歴史を伝えている。



芭蕉の句碑

(大正初期撮影)

天明8年建立。日和山一古い碑。





# 日和山公園 文学碑マップ

(酒田市都市計画課制作案内図より)

- ① 松尾芭蕉  
こうだるはん
- ② 幸田露伴  
あきさるたけし
- ③ 秋沢猛
- ④ 与謝蕪村
- ⑤ 斎藤茂吉
- ⑥ 野口雨情
- ⑦ 若山牧水  
かこしまじゆせう
- ⑧ 鹿兒島寿蔵
- ⑨ 常世田長翠  
とくせうてんか
- ⑩ 東宮殿下
- ⑪ 松尾芭蕉
- ⑫ 松尾芭蕉
- ⑬ 井上靖
- ⑭ 高山彦九郎
- ⑮ 正岡子規
- ⑯ 伊東不玉
- ⑰ 正岡子規
- ⑱ 斎藤茂吉
- ⑲ 吉田松陰
- ⑳ 竹久夢二  
おぐらきんのすけ
- ㉑ 小倉金之助  
いとうまらのすけ
- ㉒ 伊藤言之助
- ㉓ 結城哀草果  
しぐれおとわ
- ㉔ 時雨音羽
- ㉕ 伊佐湖南  
せとうとふや
- ㉖ 佐藤十弥  
たやまかたい
- ㉗ 田山花袋
- ㉘ 宝夏静
- ㉙ 詠み人知らず